ポル・キューバ

PORCUBA

キューバに米を！

キューバ入植から100余年の歳月を超え、「米」がつなぐ、日本人のこころ。思いは運命に導かれて海を渡る。

EL PROYECT DE ARROZ
EN LA ISLA
DE LA JUVENTUD

キューバ・青年の島
米自給支援プロジェクト

キューバ・青年の島 米自給支援プロジェクト報告集vol.4

青年の島（スペイン語：Isla de la Juventud）

キューバに属する島。島の面積は 3,056km^2 で、キューバ本島を除いては最も大きい島である。西インド諸島の中でも 6 番目に大きい。1978 年に改称されるまでは、ピノス島と呼ばれていた。

キューバ本島西部南岸のバタバノ湾から南西 100km、ハバナやピノール・デル・リオからほぼ真南にある。島単独かつ全体が特別自治区とされ、中央政府により直接統治されており、その広さ・人口・経済的な性格はキューバの他の州と異なる。

350 もの島と珊瑚礁からなるカナレオス諸島の中で最も大きいこの島には、10 万人近い住民がいる。最大の町は島の北部にあるヌエバ・ヘローナで、自治体の州都でもある。2 番目に大きく最も古い町は、島の内陸部にあるサンタ・フェである。その他の集落としては、コロンビア、マッキンレイ、サンタ・バルバラ、クチージャ・アルタ、プンタ・デル・エステ、シエラ・デ・カバージョス、シエラ・デ・カサがある。

歴史

プンタ・デル・エステの海岸の近くの幾つかの洞窟には、原住民の手になると見られる 235 点あまりの洞窟絵画が残されているものの、クリストーバル・コロンがやってくる以前のこの島の歴史については殆ど知られていない。ヨーロッパでは、彼による 1494 年の第 3 回の新大陸への航海によって、初めて知られるようになった。コロンはこの島を La Evangelista と呼び、スペイン領と宣言した。以来、島は時代によって、Isla de Cotorras（オウム島）と呼ばれたり、Isla de Tesoros（宝島）と呼ばれたりしてきた。

この海域やその周辺で活躍した海賊たちは、英語の文献の中にその記録が残っている。ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『宝島』、ジェームス・マシュー・バリーの『ピーターパン』は、その題材をこの島やその住民、また海賊たちについて語られてきたことの一部から採っている。たとえば、海賊や先住民たちがしばしば使っていた丸木舟やこの島にいる大きなアメリカワニなどはそうである。

米西戦争でアメリカ合衆国が勝利を収めてから、1898 年のパリ条約の締結により、スペインはキューバに対する領有権を放棄した。青年の島は、キューバの領土を定めた覚書からその名が脱落していたため、アメリカ合衆国と新に独立したキューバとの間で、領土問題での係争案件となった。1907 年アメリカ合衆国の最高裁判所が、青年の島は合衆国に属するものではないとの裁定を下したため、合衆国政府は、それ以上の争いを断念し、1925 年アメリカ合衆国政府とキューバとの間での覚書を取り交わし、この島の領有権はキューバ政府のものとなった。

地理と産業

島の大半は松の森で覆われている。これは島の主要産業である材木業の貴重な資源となっている。北部は低い岩盤の尾根になっており、そこには大理石の採石場がある。対して、南部はやや小高いフラットな土地が続く。基幹産業は、農業と漁業で、レモンと野菜の栽培が盛んに行われる。火山活動のおかげで、黒土の海岸が連なっている。

島は温暖な気候に恵まれているが、しばしばハリケーンに襲われる。これはビーチやリゾート、有名なビビジャグア・ビーチも含めて、ほとんど観光客の宿命といってもいいようなものである。キューバ政府が 1960 年代初めにあらゆる外国人の所有する財産を国有化するまでは、ほとんどの土地はアメリカ人の所有に帰していた。

《wikipedia から抜粋》

2013年冬稲作支援訪問記

クバポン代表委員　君島一宇

2013年秋　青年の島における稲作支援について

新潟県　菊田　仁

キューバ・青年の島、メヤ地区の田んぼにて収穫前のもみを手にする菊田氏（左）とヘスス氏（右）

日本キューバ連帯委員会
クバポン
CUBAPON

2013年秋　青年の島における稲作支援について

新潟県　菊田　仁

写真
上（左）、地区共産党幹部のエステバン氏。
上（右）、上河よし子さんは青年の島に在住の日本人。旦那様は日系３世のアルベルト・半沢さん
中（左）、ヘスス氏、青年の島大学。今回支援活動の現地の窓口となる。
中（右）、菊田仁氏。新潟県加茂市出身。４月から現地へ2年間駐在する下、宮沢ノボルさんは青年の島在住のキューバ移民２世。大学で教鞭を執るシステムエンジニア。日系人会の会長を務める。

２０１３秋、クバポンの青年の島稲作支援活動として、君島さん、松矢さんとともに１２月１日～４日の間、青年の島の稲作支援関係を中心に訪問し、稲作活動の取り組み状況を確認してきた。

２００９年秋から９回目の訪問となるが、今までの訪問を助けてくれた日系人会の会長の宮沢昇さん、日本人である上河よし子さん、訪問を取り仕切ってくれるエステバンさんの出迎えを受け訪問中も親切な対応して頂いた。支援活動の窓口であった島の大学のヘスス氏が中心となって対応して頂いた。

1　2013年度の稲作栽培は終了

支援対象地区は４か所あるが、フカロ地区の原田さんは種播きを実施したが、大雨で腐ってしまって、種籾用に１８０kgしか収穫できなかった。次年度も推奨すべき品種であるＬＰ５（栽培期間が短く、収量性が高い品種）を作付け予定とのことであった。また、徳永さんも来年は作付する予定とのことだった。しかし、島の東部は川や湖がないことからこのようなことが水での問題が起こりやすく、心配である。

また、デマハグア地区は宮沢さんの甥のマルシアル・ミヤザワさんに会えなかったが、予定通り井戸は掘ったものの、異常降雨で埋まってしまったとのこと。そのため、作付けができなかったとのことであった。

メヤ地区はキューバの品種であるＬＰ５、ＬＰ７を作付けたことから 394ha で 320kg/10a まで収穫できたとのことだった。ただし、予定より収穫作業が遅れ、この時期でも終わっていなかった。1か月遅れで収穫は、倒伏や鳥害、籾が落ちる等して、減収するとのことだった。

シロ・レドンド地区のアルベルトさんは雨季に 2 回目を作付する予定だったが、激しい降雨により溜め池が壊れ、田んぼに入水ができなかったため、作付もできなかった。冬に作付した収量は、前年より増収したとのことだった。

稲作りの作柄を安定させるには、栽培期間を短いＬＰ５、ＬＰ７などの新品種を導入することに加え、苗を植える、いわゆる田植えをすることで改善できる。例えば雨季等の異常降雨や干害等の異常時にも対応できる。ロス・パラシオス研究所があるピナル・デル・リオ地域は田植えを実施しているようだ。今後の支援で島でも定着させたい。

シロ・レドンドのアルベルト・半沢さんの田んぼを視察する

2　草の根無償支援が未だ動き出せず

在キューバ日本大使館による草の無償支援は農林省の許可が出ておらず、約２年間動いていなようである。プロジェクト実施主体である大学は物資購入を手伝ってくれるＮＧＯと検討した結果、農林省から高等教育省を申請先に変え、２月に間に合わせるとのことだった。大使館に確認したところ、延長は可能だとのことだが、早めに許可されれ、機械整備ができれば、田植えも可能になるし、稲刈り作業も適期にできるようになる。早めに取り組みを希望する。

3　肥料代わりに海草他も可能性あり

キューバでは肥料が輸入品で欲しいだけ手に入れることができない。そのため、現地にある有機質を活用して、栄養分の補給が必要である。しかし、日本では肥料となるものが、キューバでは人間が食べ、家畜が食べることで大量に確保することができない。

この間の訪問で、もみ殻や海草を肥料にならないかと提案した。また、豚糞や鶏糞等も検討してきた。今回も大規模豚飼育施設の豚糞使用ができるか検討したが、構造上無理があった．ただし、各種モノは検討できても、これらを運ぶ手段、特に燃料が高いため、どうするかを検討する必要がある。

パラシオ海岸で肥料として利用可能な海藻の採取

4　米粉や木酢液等新たな取り組みを検討

キューバ人は「柿の種」が大好きである。米菓全般が好きであるが、キューバでは売っていない。このことから米粉を活用し、米菓を作ることができるのではないかと前回、米粉を作るために粉砕機を持っていた。今回、上川さんが工夫して作ったアラレはおいしかったが、島では売れないようである。購買力のあるハバナでの販売ができないか検討の余地がある。また、今後、随時、米粉を生産するため、ベトナム等から米粉や精米の機械を考えるべきかもしれない。

また、今までの炭を作るときにでる「木酢液」を活用できないか提案してきたが、まだ、うまくいっていない。現地であるマラブの炭を作っているのでなんとか「木酢液」で殺菌できないか、防除ができないか具体的に取り組んでいきたい。

国営の養豚場の視察

5　ポンプホースはキューバに到着

支援したポンプはシロ・レドンドのアルベルトさんのものは問題ないが、デマハグアのマルシアルさんのものはインジェクターの問題ではなく、他に問題があるようである。

今後も機械を導入した場合には故障した時の支援体制が必要である。

バナナとキューバ産米の米菓。“かっぱえびせん”のような味も楽しめる

6　各地区農業者を交えて会議を実施

今回、各地区から代表者に集まってもらい、支援内容を検討した結果、キューバ本島の稲作研究機関であるロス・パラシオスに研修に行くことでまとまり、この間も行ってみる計画だったが、宿泊経費を心配し、未だに行っていない。「百聞は一見にしかず」とのことわざがあるが、農業者の技術を学ぶ手段として、日本の農家も先進地を視察しおり、大切なことである。キューバ人の交通費はキューバペソでの支払いなので我々からすれば安い額で済む。

故障したポンプは問題の部位が不明のまま、修理が急がれる。

7　4月から青年の島へ始動実施

4月から2年間、6か月をめどにクバポンの稲作支援として、青年の島で活動することしている。この訪問でも滞在ビザの検討や移動手段等の検討をしてもらった。4月以降は草の根無償支援で導入する機械の定着、特に田植えによる栽培の定着を図るために支援を行っていきたい。

また、前回訪問した保護区であるスールは非常にきれいな海と原住民が住んでいた洞窟を見ることができた。青年の島もまだまだ見ていないところもあり、どんな資源があるか、今後も見ていかなければならない。

地区農業者との会議後、ヘロナにあるレストランでの食事会

PORCUBA
el proyecto de arroz en la Isla de la Juventud

２０１３年冬稲作支援訪問記

クバポン代表委員　君島一宇

青年の島のヘスス・モンタネ・オロペス大学の構内

大学内にてプロジェクト関係者による現況報告

メヤ地区の小学校にて左端が校長と教諭

今回の訪問は、青年の島での稲作支援の現況調査を中心に行うことを目的としたことから、私と松矢クバポン事務局長、菊田稲作専門技術員の３人で行った。

１１月３０日成田発１７時でトロント経由、ハバナ着は予定通り順調に進んだが、翌１２月１日のハバナから青年の島（ヌエバ・ヘロナ空港）行きの飛行機が約１２時間遅れとなり、島での日程が多少窮屈になった以外は当初の日程を消化することができた。これも現地での行動日程をコーディネートしてくれたエステバン氏によるものと感謝している。

１２月２日朝、いつものホテル・ランチョを出て、島のヘスス・モンタネ大学へ。ここで９時から約１時間、現地プロジェクトの責任者、ヘスス・ディアス氏から現況報告を受けた。参加者はミヤザワ・ノボル氏の他に大学関係者数人が同席した。

その内容は、

① プロジェクト計画の中心である「草の根の支援」について政府の認可がまだ下りていない。よって、認可申請を農業省から高等教育省に変更して手続きを進めたい。

②日本大使館の申請は２０１４年２月で有効期限が切れるので、それまでに高等教育省の認可を取るか、又は、申請の延期を日本大使館に働きかけるかとなる。

③ミンセックに支払う５％手数料は変わらないが、それは島の教育省が支払うのでプロジェクトの負担とはならない。

④フリオ・アントニオ・メヤ地区の今年の作付け面積は３１４㌶（昨年１６０㌶）に増えたが、１㌶当たりの収穫は減少した。作付け種はＬＰ７が主流である。

この報告で認可申請を農業省から高等教育省に変えることを初めて知ったので、ハバナに戻った時日本大使館で確認することとしたが、前回（２０１２年１１月）訪問時にミンセックが農業省に申請済みと聞いていたのでびっくりだった。

続いてプロジェクト傘下の現地視察に入った。

〈フリオ・アントニオ・メヤ地区〉……島の中央南部

ここのＣＣＳノエリア副代表によると、作付け面積は３１４㌶、品種はすべてＬＰ７で、今期の収穫は㌶当たり２．８トン、残り８０㌶はこれから刈り取りだが、機械が間に合わない、早くしないとオンゴ病（かび）にかかるのが心配だと話す。

〈エル・フカロ地区〉……島の東北部

この地区には、ハラダさん、ミナトさん、トクナガさん、クボさんの４軒の日系人家族が農業を営んでいる。

①ハラダ・アキオさん宅（８２才、日系２世）、５月に作付けした２㌶のＬＰ５は大雨ですべて流され、僅か１８０kgの収穫で終わったので、全部次期作付けの種籾にする予定だという。現在は黒豆１０㌶、赤豆８㌶を栽培、順調に生育している。次期稲作に期待だ。

②ミナトさん宅（８０才、２世）、奥さんのナンシーさんが病気で入院中のため、今年は作付けできなかった。次期はＬＰ５を１㌶作付け予定だという。種籾はプロジェクトのディアスさんが用意することになった。

③トクナガさん宅（５５才、３世）、ミナトさんのお姉さんの娘婿。土地が砂地で稲作に適していないため、これまで作付けしたことはないが、次期は１㌶ぐらい作付けを試みたいと希望を話してくれた。現在は黒豆１㌶と乳牛２０頭、オス５頭を飼育、子牛の生産も行っている。牛は搾乳用ではなくすべて肉用牛として売っている。この１年間に４５０kg以上の牛を８頭出荷し３万２千ペソの収入があった。配合飼料など全くないため４５０kgに育つには３年かかるという。

④クボ・カズコさん宅（８０才、２世）、ハラダ・アキオさんの妹で、今は息子さんが肉牛６０頭の飼育と黒豆１３㌶、芋２㌶を栽培している。ここは土地が稲作に適さないことから、当面作付けの計画はしないと話している。

１２月３日朝８時半、ホテル・ランチョを出発して、シロ・レドンド地区へ。ここは島の北部で、通訳兼ガイドの日本人上河よし子さん一家の居住地区である。よし子さん宅から車で１０分程のところに、アルベルト・ハンザワさん宅（４０代、３世）がある。

前回（２０１２年１１月）訪れた時、作付けするために土地を耕すトラクターの燃料代がないというので、１００㌶分カンパした。おかげで作付けでき、４㌶で約８．１トンの収穫があったという。このうち１４０キンタール（約６．３トン）を政府に売却し、約１７８３０人民ペソの売り上げがあった。これは昨年（２０１１年）の売却が３７３０kgだったのに比べて約１．７倍に増えたことになる。菊田氏の指導が実を結んでいることを実感した。

続いて、ラ・デマハグア地区にマルシアル・ミヤザワさん宅（４０代、３世）を訪ねたが連絡が取れておらず、行き違いとなり、奥さんのマガリ・アリラールさんと話したが今年は水不足で作付けできなかったという。マルシアルさんはミヤザワ・ノボルさんのお姉さんの息子でノボルさんの甥にあたる。お姉さんのキヨコさん（７２才、２世）は私が初めて青年の島を訪れた１９９８年にお会いしてから１５年経つがお元気である。因みにミヤザワさんのお父さん、松男さん（１世）は長野県飯島町出身である。

午後３時より、青年の島ＩＣＡＰ事務所において、前回（２０１２年１１月）同様、クバポン・プロジェクト・ＣＣＳ（農家）の３者合同会議を合計１７人の参加者で開催した。

会議ではプロジェクトのディアス責任者からメヤ地区の現状報告として、①作付け、収穫面積は３１４㌶で総収穫量は８７９トン（１㌶当たり２．８トン）で、その９５％に当たる８３５トンは政府に売却、残り％の約４４トンは関係農家（４２戸）の自家消費と次回作付けの種籾とする。②政府からは１㌶当たり３トンの収穫を求められている。③そのための燃料や肥料の配給は受けられる。④メヤ地区のＣＣＳのメンバーは８２戸だが、稲作メンバーは４２戸である。

続いてノボル・ミヤザワ氏からクバポンがプロジェクトに支援している会計報告があり、２０１２年１２月時点での残金が 527 CUC，２０１３年４月の支援金 400 CUCをあわせて 927 CUCの内、種籾代等で 170 CUCを支出、現在 757 CUCが残金となっている。したがって、今回の支援金 400 CUCは次回に回してほしいとのことだった。クバポンからプロジェクトへの支援は３年間で 2400 CUCの約束なので残りは 1200 CUCとなる。

今後の支出予定としてプロジェクトの運営費、種籾代、農家研修費等が報告され了承された。会議は夕方１７時に終了し、この日の夜は参加者の家族も含めて、計２７人の夕食会をヘロナ市内で開催し交友を深めた。

１２月４日朝、ホテル・ランチョを９時半に出発。アルベルトのトラックで一路島の北部海岸へ。海草を腐敗させ肥料とするための試みで海草採取を行ったのである。海草はいくらで

メヤ地区の田んぼにて

フカロ地区にて、手前の白髪の女性は日系人の徳永さんの奥様

アルベルト・半沢さんの田んぼ。小屋の手前に用水路が流れている。

ICAP事務所の中庭にて行われた３者合同会議

パラシオ海岸

青年の島での今回唯一のレジャー、「つり」をたのしむ

ICAP本部でアリシア副総裁（右二人目）と懇談、右、通訳のオスバルド氏

ペドロ・ロス元ＣＴＣ書記長との懇談。溌剌とした７４歳。

是永レイコさん（中列）による恒例のカレーパーティーにて記念写真

もあるが、塩分を含んでいるためこれを除去しなければならない。時間はかかるもののうまくいけば有機肥料となる。続いてシロ・レドンド地区の養豚場を視察。豚の糞尿を肥料として使えないか検討したが、養豚場の施設は糞尿を集積する施設はなく、また今後もその予定はないため無理だと判断。結局、牛・豚・馬の糞を根気よく集めることとした。

昼食をよし子さん宅でいただき､午後は唯一のレクリエーション。近くの大きな湖で魚釣り、大きなナマズとテラピラという小魚がよく釣れ楽しかった。

青年の島での日程を終了し、この日の夜、予定より３０分早く２０時１０分ハバナ行きの飛行機で島を後にした。私たちが島を訪れるたびに終始付き合って、面倒を見ていただいた、エステバン氏、ミヤザワ氏そして上河よし子さんに感謝したい。

１２月５日、ハバナのホテル・オキシデンタル・ミラマールを出発して、午前９時にＩＣＡＰ本部を表敬訪問。アリシア副総裁と懇談。彼女とは６ヶ月前東京で会って以来の再会だが、もう２０年近いお付き合いなので旧知の仲である。この懇談の中で彼女からクバポンの稲作支援に関するプロジェクトの計画書の写しがあれば支援を手伝いたいとの申し出があった。これまでも稲作支援の話をしてきたが､手伝いたいとの話は初めてだ。レイコツアーを通して、ミヤザワ・ノボルさんに連絡し、手配するよう依頼した。

その後１０時１０分からペドロ・ロス元ＣＴＣ書記長との懇談。ペドロ・ロス氏がアンゴラ大使の任務が終わり、キューバに戻ったとの話を日本のキューバ大使館で聞いていたので、この際２００６年以来７年ぶりで会いたいと私からアポイントメントして実現したものだった。ＩＣＡＰの本部に現れた彼は７４才とは思えぬほど元気で溌剌としていた。そして思い出すように自らが革命とともに歩んできた人生の話やキューバが何故教育と医療を無料にしたかなど、滔々と話してくれた。今は年金生活だが仕事をやり遂げた充実感があったのか、嬉しそうな顔だった。最後に福島原発事故で日本は大変でしょうとお見舞いの言葉をいただいたが、影響はカナダ、アメリカにまで及ぶと報道されていることを紹介してくれた。

午後３時にハバナの日本大使館に伺い、築山淳志二等書記官と杉本要「草の根無償資金」担当者と懇談した。その内容は①稲作支援に関わって「草の根無償資金支援」のキューバ政府認可が遅れている問題について､②ミヤザワ・ノボルさんが日本の外務大臣から「連帯表彰」を受け、日本に招待される話の具体的内容について､③青年の島の日系人会拠点建物の建設について何らかの補助はあるのか、などについてであった。話の内容については共有できたものの、大使館としてすぐ結論の出せる事柄でもないことから、今後も情報交換を行うことで終わった。

この日の昼食後、急にキューバ農業省がクバポン（私たち）と会いたいとの情報が入り、１７時に農業省に出かけた。レオン国際部副部長が対応してくれたが、その内容は次のようなもので、私たちはびっくりした。① 今日の昼頃ペドロ・ロス氏から電話があったが、日本大使館の草の根無償資金支援を使った稲作支援のプロジェクト計画の申請がミンセックから出ていることを私は知らない。②明日にでも至急調べてみるが、１年以上も前に出ているものなら私が知らないことはない。とやや高調した顔つきで話した。私たちはこれで認可が遅れていることが判った。ミンセックは２０１２年１１月申請済みだと言っているがレオン氏が知らないのか、ミンセックが出していないのか、真相は分からない。いずれにしても、プロジェクトは高等教育省に認可申請を変えたので､農業省は邪魔をしないでくださいと告げ､終わった。このことは菊田さんが日本大使館に情報として伝えた。

この夜がキューバでの最後､いつものようにレイコツアー事務所でＩＣＡＰ関係者、ペドロ・ロス夫妻他を招待して、カレーパーティーで訪問を締め括り、翌６日早朝帰国の途についた。成田着は１２月７日１５時予定通りであった。

Gramma

PORCUBA　ポル・キューバ　米自給支援プロジェクト報告集　vol.4

2014 年 2 月 15 日　発行

編集：プロジェクト報告編集委員会

発行：日本キューバ連帯委員会　東京都新宿区山吹町 333 辻ビル 405

電話：03-3268-4387　ファクス：03-3268-6079